

第4章 近代和歌山の発展



ノルマントン号事件とエルトゥールル号の遭難



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

本州 最南端の潮岬あたりは黒潮洗う景勝の地ですが、江戸時代以来、上方と江戸を結ぶ海上交通の難所で、海難事故も多く発生したところでした。幕末になると外国艦船の来航も増えました。そこで、1869(明治2)年に全国に10灯台が建設されることになりましたが、いちはやく大島の檜野灯台が日本一古い石造灯台として翌年6月に点灯し、潮岬灯台は1873年に点灯しました。ところが明治時代中ごろに、この熊野灘で大きな海難事故が相次ぎました。イギリス商船ノルマントン号とトルコ軍艦エルトゥールル号の遭難です。ともに近代国家への道を歩み始めたわが国の国際問題にかかわる事件でした。

ノルマントン号事件

1886年10月24日夜の大しけの中、横浜から神戸に向かっていたノルマントン号が、熊野灘で遭難し沈没しました。イギリス人の船長以下船員は4隻のボートに乗り移り、翌朝船長たち14人が分乗する2隻は串本に漂着しました。漂流中の2隻は荒波をおして須江浦(串本町)が出した141人の漁師が分乗する9隻の鯉船の献身的な活動により救助されました。3人が死亡していましたが、瀕死の2人も治療により回復し12人が助かり、計26人は26日午後急ぎ神戸に向いました。ところがその後、日本人船客全員が行方不明になっていることがわかってきました。1889年に東海道線が開通するまでは、貨物船に乗り京浜と阪神間を往来する客もいたのです。水死体があがらないことから、船倉に閉じこめられたとも推測されました。

これに対して、この事件を審判した神戸のイギリス領事館は11月初旬に船長ドレイク以下全員に無罪の判決を下したため、国民はくやしがり、船長たちが乗客を見棄てて避難することはおかしい、日本人を蔑視するものなど世論が大いに高まりました。ここにいたって、日本政府は兵庫県知事に船長以下を殺人罪で神戸のイギリス領事館に告訴させ、また沈没船を捜査し日本人の遺体を実地検分しようとしていました。はじめノルマントン号の沈没場所は潮岬海上の暗礁付近と推定されていましたが、漁業者の証言で潮岬より東の勝浦港外と推定され、11月22日から3日間捜索しました。水深があり水底までは潜ることができず十分に捜索できないまま、結局勝浦港沖約4キロメートルの地点を沈没場所と推定し、11月24日に勝浦の狼煙山に木標を建てました。国民の手前実施したもののイギリスに遠慮したかのような捜索活動といわざるを得ないものでした。

同年12月8日横浜のイギリス領事裁判所が下した判決は、船長は職務怠慢罪で禁獄3か月、他は無罪という軽いものでした。その理由は、当時わが国は、不平等条約をおしつけられていて裁判権がなく、イギリス領事による裁判であったからです。

このころ日本は、欧化政策をとり不平等条約の部分的回復交渉を進めていましたが、この事件を契機に領事裁判権の完全撤廃、条約改正をさげぶ国民の声はさらに高まり「ノルマントン号沈没の歌」が流行し、明治政府を大きく揺さぶる事件になりました。結局、領事裁判権については1894年に完全撤廃できました。

* 1 ヨーロッパ文化の移植を目的とした外交政策。

なお、救援活動などに不便を感じたことから、串本地方では英語習得がとなえられ、翌年2月、串本小学校に大人向けの英語の夜学がはじまり、小学校教科に英語科が加えられました。小学校での英語の授業は県下初であると見られています。

エルトゥールル号の遭難

トルコはアジアの西端、ヨーロッパに接する所であり、19世紀末にはヨーロッパ列強の圧迫に苦悩していました。それで、アジアの東端にあって欧米の侵略を辛うじて防ぎ近代化を進めていた日本に敬意の念を抱き、トルコ皇帝は日本に親善使節を派遣しました。

日本との親善の行事を終えて帰国の途についていた1890年9月16日夜、使節を乗せたトルコ軍艦（エルトゥールル号）が遭難しました。熊野灘で暴風に遭い、串本町大島の檜野灯台下の岩礁に乗り上げて艦体を打ち砕かれました。生存者はわずか69人（うち重軽傷63人）、540人が水死または行方不明という大事故となりました。17日未明に傷を負った外国人が灯台職員に救助を求めました。朝、大島村の人々は、漂着した負傷者を寺院と灯台官舎などに収容し、医者が治療・看護し、村を挙げて衣食を提供しました。また収容した遺体は共有墓地に埋葬しました。18日は海面に漂流する遺体を引き揚げるため大島・古座・西向（いずれも串本町）などから船や人々が出ました。遺体が多いので、共有墓地では収容しきれないうえに遠いので、遭難現場の近くに埋葬地を設定し、その後の遺体はそこに埋葬しました。9月末まで続けられた捜索や漂着で約220人の遺体を収容しましたが、約320人は行方不明でした。



トルコ軍艦記念碑（串本町）



エルトゥールル号の遭難を記述したトルコの教科書

トルコは海軍選り抜きの軍人たちを失い大きな打撃を受けましたが、トルコ政府は大島村の人々の献身的な努力に感謝して、3,000円（現在の約3,000万円）を村に贈りました。1937（昭和12）年、遭難墓地の改修が行われた時に、この事故を悼んで埋葬地の近くに大理石の遭難碑が建てられました。

また、1974年、トルコ記念館が建設され、館内にはエルトゥールル号の模型や遺品などが展示されています。遭難碑では今も5年ごとに追悼式典が行われ、記念館とともに日本とトルコの友好の絆となっています。